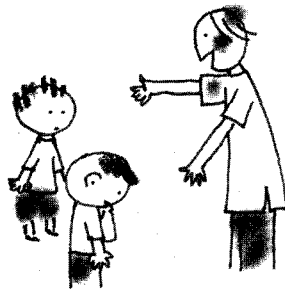


「わたしたち」のはすねっこ体験

～面白さと切なさのレッスン～

菊地知子



さながらの生に出会う

はすねっこボランティア実習

放課後クラブはすねっこ（以下、はすねっこ）は、東京都板橋区にある、障^{しょうがい}碍の子どものための学童クラブ、すなわち放課後や土曜日と長期休暇中の子どもたちの居場所である。地域に根ざしてはぐくまれている、学校と家庭とをつなぐ小さな小さな場で、通う子どもたちは小学生から高校生までと幅広い。^注

二〇〇八年度お茶の水女子大学発達臨床心理学講座一年生の必修授業「発達臨床基礎論Ⅱ」では、主に、夏休み中の午後二時から六時まで、学生が一人二回ずつ、はすねっこにボランティア実習に入らせてもらった。これは、二〇〇八年度からの新たな取り組みであると同時に、例年の引き続きとなる私立愛育養護学校（以下愛育）の一日実習と合わせ、学生たちが自ら身をもって子どもとの世界を生きる体験の、相補的な意味も込めた試みでもあった。

はずねっこにせよ愛育にせよ、そこでの体験は、大学の講義で得ていく知識や技術とは両立しにくい、理的判断や評価を保留にせざるを得ないような、いやおう無く身体ごと、そこに巻き込まれてしまうものになるであろうことが予想された。それをじっくりと味わってほしいとの思い、また、どこか遠くの知らないところにいる「わたし」と「誰か」の全く別々な物語ではなく、地続きの、まさに同じ時空間を共有しうる者同士である「わたしたち」の物語を紡いでほしい、という思いがあった。

深い思いのつづられた記録が次々届く

七月初旬の授業で、ボランティア実習のガイダンスを行った。はずねっこから来てくれた佐藤さんは、スライドを写しながら、子どもたちの様子、はずねっこ設立の経緯や、スタッフの思いなどを話してくれた。また、若いスタッフの石原さんからは、服装やおやつ

作りの手伝いについてなど、具体的な注意事項をきいた。次の回の授業では、教員自身が、はずねっこでの子どもとの体験から感じたことを、少しばかり話し、また、「はずねっこへのたどり着き方」という紙を配って、それに沿って、道順をていねいに説明もしておいた。

これらにより学生たちは、全く未知の場所であったはずねっこを多少なりともイメージし、また、スタッフの人柄に実際に触れて、訪問を楽しみにもできるよくなったようだった。

かくして、学生たちのはずねっこ行きが始まる。夏の間、毎日のように学生からの記録がパソコンに届くようになった。

記録の中で、子どもと遊べて楽しかった、面白かった、2回目を楽しみ、ぜひまた行きたいなどとシンプルに語る者が多かったが、ただ陽気に楽しいというのではなく、どの学生のどの記録にも、読む者の気持ち

をグッと揺らさずにはおかないような、不思議な力、
思いの深さが感じられた。

わたしたちの授業では、実習や振り返りに限らず、
子どもあるいは人間を、単に操作や治療の対象として
理解しようとするのではなく、われも彼も弱きもの・
小さきものであり、かつ、主体として生きる存在とし
て、否定的でない関心をもって感じ考えていってほし
いと思っている。学生に対して、それをそのまま言葉
にして伝えることこそ、してはこなかったが、なんの
ことはない、彼女たちは、はずねっこ実習で、わが身
をもって、そのことに気づいてしまうような体験をし
てしまったのだった。切ない思いをさせているなあ、
と後悔や反省としてではなく、ただ心から思った。

「切ない」には、「①(寂しさ・悲しさ・恋しさなどで)
胸がしめつけられるような気持ちだ。つらくやるせな
い。②大切に思っている。深く心を寄せている」など
の意味がある(三省堂大辞林より)。その両方を含ん

だ思いを学生がしているように、記録を読んで私は感
じたのだった。

実習を楽しみにもしていたはずなのに、学生たちは
はずねっこの扉をたたく前には、まず、自分自身がそ
の場に本当に受け入れてもらえるのかと不安に思う。
そして、実際に子どもものそばにいる時も、受け入れて
もらえているのか、子どもが「私をよそ者として振る
舞っているように」、あるいは「私の存在は無い
かのようなそぶりを見せている」ように感じたり(「近
づいても」何度もするりとかわされてしまい、少しし
てまた近づいてみるのだが、かわされ続けて、戸惑っ
てしまった)人もあり、「(子どもが)手を振ってくれ
て、ああ仲間と想ってもらえた、とほっとした」とい
う学生もいた。また、つなごうとする手に爪をたてら
れ、「なぜだろう、と考えもせず、ただただ、痛くて、手
をつなぐ形に持ち込むことに必死」になるようなこと
もあった。

さらには、ほとんどの学生が、保育後のミーティングで感じることの多さ、考えさせられることの多さに触れていた。以下にその一部を載せる。

「ミーティングのときに、佐藤さんが、障碍をもった子どもたちであっても、普通の部分で付き合っていきたい、と言っていたことがとても印象に残っている。何かが起これば、子どもだって怒るし、だけどちゃんと説明すれば、理解して納得してくれる。そんなような、誰にとっても同じような部分で付き合っていきたいという思いに共感した」「子どもたちにはそれぞれ『すき間』や『あやうさ』などのテーマがあると話していました、子どもたちの視線の先や行動の感じなど、全身でのコミュニケーションの大切さを肌で感じる体験でした。(中略)はすねっこに行ってみて、もう丸一日がたちましたが、まだいろんなことが勝手にどんどん思い出されるほど、とても印象的で刺激的で楽しい体験をさせていただきました。……とても温か

く迎えてくださったお二人の佐藤先生、そして七人の柔らかくて、あつたかくて、一生懸命な子どもたちに感謝しています。」「その子と私で、積み木を壊れないように高く積みました。(中略)ミーティングで、その子はそれまで、積み木を横に並べることしかしなかったと聞いて、その子の『初めて』に出会えたと思つてとてもうれしかった」

振り返り・分かち合いの授業で

後期に入り、発達臨床基礎論Ⅱは発達臨床基礎演習Ⅱへと衣替えをし、担当教員のうち、塩崎・菊地は留任、浜口は柴坂に交替した。

わたしたちは、前期の大きな活動であった「はすねっこ実習」について、授業名や担当者が代わっても、しっかりとリフレクシヨンの時間をとりたいと考えていた。そして、後期初回ガイダンスの授業の翌週に、まずは、それまでに提出されたはすねっこの記録

を無記名にして打ち出し、一人に一人分ずつランダムに配り、自分の手元に配られたものをグループ内の人に読んで聞かせ合う、という活動をした。聞き合ったのちには、グループ内でそれぞれが思うところを述べて、授業最後に提出用紙に感想を書いた。

その翌週は、前週に出された感想すべてをコピーして全員に配り、目を通した後、前週のグループディスカッションと配布した感想を元に、一人ひとらずつ、感じたことを言葉にして伝え合った。見えないボール（空気のボール）をまずは、授業者から一人の学生に投げて（投げる真似をして）、それを受け取った人が発表をし、発表者からまた誰かにボールを投げて、受け取った人が次の発表者になる、という手順であった。

発表が進むうち、しだいに学生たちは、考え考え、たどたどしくではあるのだが、言葉が自分の内側から出てくるのを抑えきれない、という感じで語るようになっていた。この日、いちばん最後に「ボール」を受

け取った担当教員の柴坂は、「この二度目の振り返りの発表を受けて、どの人の話も、言葉がただ単に並べられた言葉ではなく、その背景に自分でしっかりと感じた思いや体験があるということが、言葉と言葉の間（見えないところ）から伝わってきた」と語った。そして、この日の授業後の感想用紙には、この柴坂のメッセージが、自分たちの思いにかなうものであったという感想を、多くの学生が記していた。

ここから始まる「他者と共に在ること」

複数の色の光が重なると、黒や闇や濁りがつくられるのでなく、無色とも透明とも呼べるような白い光になる、ということを知った子どもたち、私はいたく感嘆した。

「面白い」という語は、もともと、「面（おも）白し」で、目の前がぱっと明るくなる感じを表すのだという（三省堂大辞林による）。今回の実習とその後の振り返

りで、学生たちはそれぞれに、いろいろ違った色の光が重なり合うような体験をしたのではないかと、ふと思った。ペースになる実習での体験は、時に面倒で、時間がかかって、もどかしくて、不便で、カラカラと乾いて楽しいばかりではなかった。それでも、いや、だからこそ、いろいろな色の光が重なり、白い光になることで、何かにはっとして、目の前がぱっと明るくなるような、「面白い」という体験に成り得たのではないか。学生たちは、スタッフの人たちに混ざって（混ぜてもらって）、子どもたちのことをあれこれ心配したり、困ったり、気持ちを寄せたりし、その中で、自分自身についても、立ち止まったり、戸惑ったり、うずくまったりしながら考えたのだと思う。

この実習を通して、学生たちが大学内では出会いがない、現場の極上の大人に出会い、「保育」や「障碍」について共に感じ考える「輪」、あるいは「連なり」に加えてもらえたことへの感慨は深い。授業で教員が何

をどう語るより、はすねっこでの出会いを通して学生たちが育ったという実感がある。大学一年次の必修であるこの授業は、履修者の多くが、十八歳十九歳という非常に若い人たちである。はすねっこは、その若い人たちが、同じ空間で自分と地続きに、同じように主体として生きようとする障碍の子どもたち、また、そこを支えようとする大人たちに出会い、自分も受け止められていると感じることのできる場であった。自らの育ちも含んだ人の育ちに触れる人の輪が、そうしていく層にも重なってあるということに、切なくも面白い、面白くも切ない、保育の、あるいは人間学の学びの端緒が図らずも示されたように感じている。

（お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師）

注 『幼児の教育』第一〇六巻第十号二〇〇七年十月発行

にはすねっこ代表の佐藤キミ男氏が「共に生きる」と題して、人の居場所としてのすねっこについて書かれている。